

## 嗚乎田中真次君

山田作之助

今日、入手した最高裁判所判例集（第二七卷第八号、昭和四九年七月二〇日発行）を見ていると、田中真次君が上告代理人として書かれた上告理由書が載っているのを見て、思わず、嗚乎と叫んだ。田中君はすでにこの世の人ではないのである。同君は、今年の五月すでに逝去されていたのである。

そして、改めて、この上告理由書をよく見直したのである。

事案は、広島県教育委員会が小学校の校長を、何か所謂勤評問題かの理由で普通の教諭に降任処分したのに対する処分取消の申立事件であり、一、二審とも原告勝訴「降任処分を取消す」との判決であったのであるが、これに対する上告がなされたもの、その詳細を論ずるのは本稿の目的外であるから、くわしく述べないが、田中真次君の書かれた上告理由書は、行政事件上告理由書としてはこれ以上のものは書けないだろう。上告理由は、よ

く事實に即し、適切妥当な法律理論を展開し、行政事件としては、模範的上告理由であると思われた。最高裁判所は、右上告理由に基づき、上告理由ありとして、原判決を破棄し、事件を広島高裁に差し戻した。けだし田中君にとって快心事であつたであらう。

私が、田中君と最後に会つたのは、本年一月下旬、日は忘れたが田中君が私の東京の寓居に訪ねて来てくれたときである。その日は、近所に住まっている、田中君の同僚、神奈川大学教授春宮千鐵君も同席されていたのであるが、何しろ、私は平素神戸に居る関係もあり、田中君とは、約六年振りで、話はつきず、午後一時頃から七時頃迄、二人が同じ頃勤めていた最高裁判所のことなどを主として、その後、同君が勤められた神奈川大学のことなど、本当に心ゆくばかり話をしたのである。今から考えると、気のせいかな、本当に何度も何度も振り返りつつ別れを惜しんだのであるが、神ならぬ身のこの時が最後の別れであつたとは知る由もない。その後、君は二週間程して入院されたまま退院することなく、昭和四九年五月一六日逝去されたのである。後に知つたのであるが、君は勲二等の勲章も頂き、又前述のように私と思うことなく、話合いをしたことを大変喜ばれていたと聞かされ、ジンと胸に感じるものがあつた。

私が、田中君に始めて接したのは、昭和三五年、私が最高裁判所判事となった時からであり、その時、同君は、最高裁判所行政事件主席調査官として勤務されていたのである。

そして色々話をしているうち、同君が兵庫県の学務課長をしていたこと（その頃、私は神戸で弁護士をしていた）、その後、行政裁判所評定官になられ、終戦後、行政裁判所が廃止され、最高裁判所が発足すると共に、行政事件専任調査官として、最高裁に這入られたこと等を知って更に親密の度を深めたのである。

言う迄もなく、新憲法になって始めて、裁判所が行政事件を取扱うことになり、その結果、総ての行政が裁判所のスクリーンの前に立たされることとなったのであって、そのもののいかに重大かは、裁判所としても初めてのことであり、その取扱いについては特に慎重を期すると共に、又色々悩まされることも多かったかと思われる。

この困難な創革時代にあつて、すでに行政裁判所で評定官として、行政訴訟事件を担当せられ、且つ行政の実務の経験のある田中君の行政事件の調査官としての存在が、いかに最高裁判所にとって貴重であつたかは、おのずから明白な事実である。

このいわば、五里霧中の時代にあつて（行政事件訴訟法が出来たのは昭和三七年五月一六日であ

る、調査官として数多くの行政事件を処理し、縁の下の力持的な調査官としての調査報告書を作成された、君の労苦と功績がいかに重大であったかは知る人ぞ知る処である。

そればかりではない。最高裁判所調査官室に備え付けてある、膨大な行政訴訟の資料の蒐集、書類の整備等はすべて、田中君を中心とした努力によるものと察せられ、最高裁判所の行政調査官室が、他に類を見ない程、整頓された状態となっていることも、同君の努力の賜物と言っても過言ではあるまい。最高裁判所が田中君の退官に際し、破格の優遇をなされたと聞くが、誠に故あるかなである。

同君は、最高裁判所を定年退職されるや、すぐ神奈川大学の教授として行政法を講義されていた。田中君の行政法、行政訴訟法学に対する考え方は、同君の著作である行政不服審査法解説等に窺われる如く、長年行政事件を扱っておられ、殊に、戦後行政事件の調査に当られた関係上、ドイツ法的の所謂概念的・講壇的行政法にはしらず、殊に行政法にも広い意味でのデュー・プロセス・オブ・ロウの精神を持ち込んでいるやに感ぜられ、従ってその説く処は穩健妥当で、且つ、あく迄も常識に反するような結論はされなかった。

これは、一面その穩和な人柄からきたものであろうか。

田中君は逝った。そしてあの穏和な風格には再び接することは出来ないが、君が最高裁判所時代になした功績（その一部は判例解説、法曹時報に載っている）並びに神奈川大学につくした貢献は永遠に滅びないであろう。又その接した人々に対し常にあたたかな気持を与えておられた人柄は永く忘れることは出来ないであろう。